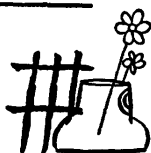


巻頭言



学会主催の国際会議を持とう

澤田 正 方†



本学会も今年で創立 25 周年を迎える。学会の歴史によれば昭和 35 年 3 月 1 日に有志 166 名による発起人会を開き、同年 4 月 22 日に設立総会が開催され、初年度の会員数は 820 人であったそうである。それから 25 年後、学会活動は会員数だけで云々することはできないが、この 1 月で正会員数が 2 万人の大会を越えた。

21 世紀に向けて、今後の社会へ大きなインパクトを与えるものとして、バイオテクノロジーとマイクロエレクトロニクスの 2 つが上げられるが、マイクロエレクトロニクス技術の発展によって、大企業しか持つことのできなかったコンピュータも中小企業はおろか個人でも所有できるようになった。コンピュータは人間の作った道具の中で最も異質のものとされている。即ち、肉体労働を助ける道具ではなく頭脳労働を助ける道具であることと、コンピュータ自体は一般の道具のように用途が限定されず、ソフトウェアによっていかようにも使うことができるわけである。

効率化、経済化を求める現代にとっては正に LSI は産業の米であり、また有能なシステムエンジニア、プログラムの確保は企業にとって死活をかけた重要な課題となっている。「ソフトウェア危機」といわれ、昭和 65 年には 60 万人の技術者が不足すると予想されている。世の中の関心が高まっている今日、本学会に寄せられる期待も大きく、また責任も重いと云える。

本年度から電気 4 学会連合大会にも情報処理学会の参加が承認され、電気・情報関連学会連合大会と改称してその第 5 部会を担当することになった。

学会の全国大会も春秋の年 2 回開催となっております。参加人員も増え活気のある学会活動となっている。研究会もまた活発な活動を続けている。学会活動が幅広い分野に活発に展開するには、やはり広い裾野と厚い会員層に支えられることが大切である。入会者が増える一方で学会誌をもっと読みやすく親しみやすいものにして欲しいという声がある。学会という制約の中では商業誌のようにはいかないとしても、学会誌だけ

は学生や一般の利用者も含めて会員同士が身構えずに意志の疎通が計れるようにしたいものである。2 万人の会員で満足するのではなく、数年後には情報処理技術者の 1 割程度 4 万人の会員を目指し魅力ある学会活動を展開したいと思う。

情報処理学会は情報処理国際連合 (IFIP) の日本での唯一の加盟団体として誕生した経緯があり、国際活動も大切な役割である。IFIP も今年で 25 周年を迎えることになるが、今年の秋には IFIP の総会が日本で開催される。学会ではこれに合せて全国大会を予定し、来日する総会メンバの協力も得て、有意義なシンポジウムを開催すべく計画中である。

さて、国際会議であるが、1980 年に IFIP の世界コンピュータ会議を日本で開催し、2,264 名の参加を得て成功したことはまだ記憶に新しいが、このように大規模な国際会議を本学会が主催するまでには 3 次に亘る日米コンピュータ会議が行われ、その経験がその成功に結びついたものである。日本で行われる国際会議の殆どが、アメリカまたはヨーロッパで提唱されたもので、日本がその国際会議を招く形で開催される。国際会議でいつも問題になるのは財務で、発起人は資金集めと実行組織の構成に大変な苦勞をされる。また海外の主催団体とは上納金でもめることも多い。しかし、国際会議を企画し、定期的に永続して開催することは大変なノウハウとエネルギーと財政基盤が必要であることも事実である。世界コンピュータ会議の後、日米コンピュータ会議も中断したままである。先般 ICOT が開催した第五世代コンピュータ国際会議の盛況をみても、企画にもよるが国際会議の意義と必要性は十分にあると思う。情報処理学会もそろそろ独自の国際会議を企画するべきでなかろうか。

特に最近「太平洋の時代」といわれている。高度情報社会に向けて今後ますます発展が期待されるこの分野で、この地域の発展の中心となって学会が活動することは、会員のみならず日本の将来にとっても有益であると考えらる。

† 本会理事 日本国有鉄道東京システム開発工務局

(昭和 60 年 2 月 4 日)